

令和 5 年度

目黒日本大学中学校

入学試験問題

国 語

試験時間 50 分

注意事項

- 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- この問題冊子は、全 13 ページあります。
- 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図がありましたら、解答用紙を取り出してください。
- 解答はすべて解答用紙の決められた欄^{らん}に記入してください。
- 試験中に質問がある場合は、手を挙げて監督者^{かんとくしゃ}に知らせてください。
- 試験終了後、監督者の指示にしたがって解答用紙を提出してください。
- 解答用紙に、受験番号・氏名を記入してください。
- 解答は、特に指示がないかぎり、句読点や記号をふくむものとします。

受験番号	氏 名

一

次の各問いに答えなさい。

問 1

次のぼうせん部の漢字の読みをひらがなで答えなさい。

- ① 彼の発言は、浅薄であいまいなものだ。
- ② 式典に厳かな態度で臨席する。
- ③ 彼の思わぬ発言に、頬が真紅に染まった。

問 2

次のぼうせん部のカタカナを漢字で答えなさい。

- ① 友人の案が否決されることを想定し、フクアンを準備する。
- ② 必要なものと、そうでないものをシュシャ選択する。
- ③ 彼に対してセイイある対応を取る必要がある。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

すべてのゴミはなくすことができる。そうなれば、環境問題の一つは一気に解決だ。そんなすばらしい方法を考えた人がいる。名前は、赤瀬川原平。^①

赤瀬川原平は『老人力』（筑摩書房、一九九八・九）という奇妙なタイトルの本を書いた人である。ふつうは物忘れなどは「衰えた」と感じたり、そう言ったりするものだが、赤瀬川原平はそれは「老人力」という名の「力」がついたのであって、それはそれで便利なこともあるなどと、とばけたことを言っている。こういう発想の逆転にこの人の面白さがある。

その赤瀬川原平はゴミをなくすためにどういう妙案を考えたのだろうか。そもそもゴミとは何だろうか。赤瀬川原平によると、こういうことになる。

ゴミというのは人間の作る人工物から出てくる。それをたとえば動物が見たらゴミでも何でもないのだろうが、それを人間が見るとゴミに見える。

（『背水の陣』日経BP社、二〇〇三・六）

なるほど。どうやら「人間」が「動物」になってしまえばいいらしい。と思うと、そうではないようだ。

長い自然の歴史、宇宙の歴史の中で、生物の中から次第に人間というものが形成されて、その人間がゴミを吐き出しはじめる。それを人間だけが、ゴミだゴミだいいながら、その人間世界が次第に崩れて人間が少しずつこの世から消えていくと、ゴミもこの世から消えてなくなっていく。

（前出『背水の陣』）

赤瀬川原平は恐ろしいことを言い始めた。人間がこの世界から消えてなくなれば、ゴミもなくなると言うのだ。へあるものをゴミと見るのは人間だけなので、人間が地球上から消えればゴミも消える」と言うわけだ。そう言われればたしかにそうだけでも、考えようによってはかなり恐ろし

い話だ。

しかし、実はこれは哲学的にはすでに「定説」になっっていることなのだ。それはヴィトゲンシュタインという哲学者の説を、後に「言語論的転回」と呼んだもので、「コペルニクスの転回」をもじった言い方だ。ポーランドの天文学者コペルニクスは、宇宙が動いていると考える「天動説」に対して、動いているのは地球の方だと「地動説」を唱えて、それまでの宇宙観をひっくり返してしまった。十六世紀の出来事だったが、これが近代的な世界観の形成に寄与した。「言語論的転回」はそれに匹敵する哲学上の「大発見」で、ポストモダン（近代以降、すなわち現代）の世界観の形成に寄与した。現在の社会科学は多かれ少なかれ、この「言語論的転回」の影響下にあると言っても過言ではない。

「言語論的転回」を一言で言えば、「世界は言語である」となる。ぼくたちはふつう世界がすでに存在していて、それを言葉によって（言葉を道具として）人に伝えていると考えている。しかし、これは「言語道具説」といういまや古くなった考え方なのである。「言語論的転回」では、ぼくたちは言葉を通してしか世界を理解することができないと考える。

ただし、この説明は厳密ではない。もう少し厳密に言えば、「言語論的転回」においては、言葉の先にモノとしての世界は想定されていないのである。ぼくたちはモノ・そのものに触れることさえできないと考える。「世界は言語である」と考えるのだから、言葉がすべてだ。妙な言い方をするなら、ぼくたちが生きている世界はすべて言葉で「X」されているのである。言葉で意味が与えられているということだ。言葉が与えられない物事は存在しないに等しい。言葉の外には世界はないのである。ぼくたちは、まるで言葉の世界に閉じこめられているようなものなのだ。

具体例を挙げて説明しよう。日本の医療現場では「抑制」という医学用語がよく使われていた。簡単に言えば、徘徊する患者をベッドに縛りつけることである。ところが、これは非人間的だと考えた医師がいて、その医師はそれまで「抑制」と書かれていた看護日誌に「縛った」と書かせたのである。そうすると、看護師に大変な抵抗が出てきた。もちろん、それがこの医師のねらいだったのである。「抑制」と書くとは医療行為の一つだと思えるが、「縛った」と書くとは人間の自由を奪ったとしか思えなくなるのだ。そこで、その病院ではベッドに患者を縛り付ける行為が激減したと言

う。「抑制」と書くのと「縛った」と書くのと、行っていることは同じだ。しかし、言葉を変えることによって、看護師が行っていることの意味が変わってしまったのである。医療行為が自由を束縛する行為に変わってしまったのだ。たった一語の変更で、そのことが自覚できたのである。

いや、そうではない。厳密に考えよう。ある行為があつて、それが「抑制」とか「縛った」とか事後的に名付けられるのではない。「抑制」という行為と、「縛った」という別々の行為があるのだ。「言語論的転回」の立場に立てば、そう考えるのが正しいはずだ。

⑤よく知られた例を、さらに二つ付け加えておこう。日本では雨のあと空にかかる虹はふつう「赤、橙、黄、緑、青、藍、紫」の七色に見えるが、

英語には「藍」に当たる一単語がないので六色に見えると言う。アフリカには三色や二色に見える、部族もあると言う。これは優劣の問題ではなく、色彩に関する語彙が視覚という身体感覚を規定してしまう例である。また、ヨーロッパ文化圏には「肩こり」に当たる言葉がないので、「肩こり」という病気(?)の状態がないらしい。「背中が痛い」と言うのだそうだ。「肩こり」という言葉がなければ、肩はこらないのである。これも言葉が身体感覚を規定する例だ。

こういう例を知ると、ぼくたちは言葉を通してしか世界を理解できないと考えたのではまだ不十分で、「言葉が世界だ」と考えざるを得なくなってくるだろう。これが「言語論的転回」という考え方である。

「言葉が世界だ」とすると、言葉を使う人間がいなくなることは、「世界」がなくなることと同じだ。あるモノをゴミと呼ぶ人間がいなくなったら、そのあるモノは「ゴミ」ではなくなる。もつと言えば、「あるモノ」でさえなくなるだろう。なぜなら、「あるモノ」という理解の仕方でもまた言葉だからである。こうして「人間が地球上から消えれば、すべてのゴミも消える」のである。なんと単純明快で、すばらしく恐ろしい方法だろうか！

(石原千秋『未来形の読書術』)

問1 ぼうせん部①「すばらしい方法」とあるが、どのようなことか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人間が人工物を作らないようにすること。
- イ ものに対する人間の感覚を動物のようにすること。
- ウ あるものがゴミに見える感覚を人間からなくすること。
- エ あるものをゴミとして認識する人間がいなくなること。

問2 ぼうせん部②「奇妙な」と筆者が言うのはなぜか。その理由として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 一般論を疑うことの大切さを感じるタイトルだから。
- イ 一般的なものの見方をくつがえすタイトルだから。
- ウ 常識的なものの見方よりも大事なことを発信しているから。
- エ 社会の中で皆が感じていることを代表して言っているから。

問3 ぼうせん部③「言語論的転回」とはどのようなことか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 言葉より先に世界が存在していて、人間が言葉によって世界を把握できるということ。

イ 言葉と世界との関係は、どちらが優先的に人間に認識されるかによって変わるということ。

ウ 言葉が世界よりも先に存在しない限り、世界は人間になんの影響力も持たないということ。

エ 言葉より先に世界が存在しているのではなく、言葉があることで世界が存在しているということ。

問4 空らん X に当てはまる語として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 汚染

イ 検索

ウ 依頼

エ 交換

問5 ぼうせん部④「非人間的だと考えた医師」の行動によって起きた看護師の変化について、説明しなさい。

問6 ぼうせん部⑤「よく知られた例」とあるが、どのような例か。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 色の存在や体の一部の痛みまでもが、言葉によって成立している、という例。

イ 虹の見え方や肩こりの存在は、相手にどのように伝えるかによって変わる、という例。

ウ 虹の色の数や肩の痛みは、身体の記事をどのように表現するかによって決まる、という例。

エ 疲労の感じ方や虹の色の見え方は、どの国に住んでいるかによって異なる、という例。

問7 ぼうせん部⑥「まだ不十分」とあるが、なぜか。その理由として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 言葉は、それを扱う人間がいて初めて機能するから。

イ 言葉だけでは表現しきれない領域があるから。

ウ 言葉を、世界を認識するための手段と考えているから。

エ 言葉は、非現実的なものも表すことができるから。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

野亜高校体育祭が迫る中、体実（体育祭実行委員）が生徒会との話し合いをするために生徒会長（笠原）を探している。図書館ではわたし（百瀬）と朔太郎が『飛ぶ教室』の謎を解くために話をしていた。

カウンターに戻ると、奈良君の姿がなかった。時刻は午後五時四十五分。窓の外はすっかり暗くなり、海が黒々としていた。そろそろ体育祭の練習や準備も終わる頃だ。奈良君はクラスの人々と出くわさないよう、ひと足早く帰ったのだろう。

わたしも今日は早く帰りたいかった。カウンターの upper を簡単に片付け、ゴミを捨てておく。午後六時ちょうどに、伊吹さんがドアをあけて「おつかれさまでした」と声をかけてくれたのと同時に、リュックを背負った。

「おつかれっした！」

さつさと扉へ向かう。後ろで朔太郎が何か言ったが、聞こえないふりをした。

本当は階段を駆けおりたいところだけど、左足を底（かば）つてしまう。案の定、二階の踊り場で朔太郎に追いつかれた。

「百瀬さん、どうした？」

「ごめん」

「ごめん、って何？ 伊吹さんの言葉を気にしてんの？」

朔太郎はわたしの進行を阻むように先回りして階段を一段おりて、正面に立つ。いつもの身長差がさらにひらいて、ずいぶん下から見上げられた。① 全身がむず痒くなる。蚊に刺されたところは、さらに痒い。

わたしは肘の裏側を爪で強く押しながら言った。

「だって事実だし。わたしは二冊の『飛ぶ教室』に謎を見つけたとき、自分が参加できない体育祭に代わるお祭り、がはじまった気がしたんだよ。わくわくしかなかった。わたしが面白半分に謎を解くことで、誰かを悲しませたり苦しめたりする可能性なんて、全然考えなかった」

「可能性の話でしょ。実際にはまだ——」

「わかんないじゃん。わたしが知らないだけで、もう誰かが嫌な思いをしてるかも。事実、朔太郎だって最初は、あれこれ嗅ぎまわることには反対してたよね。それを、わたしが無理やり巻き込んだ。本当は迷惑してるんじゃない？」

朔太郎の黒目^②がちな目が一瞬光った。やがてゆっくりまばたきして、首を横に振る。

「迷惑してない。さつきも言ったように、今は俺もこの件に決着をつけたらいいって望んでるから」
きっぱり言い切ってくれたあと、朔太郎は顔を少し歪め、「それに」とつづけた。

「生きていたら誰だって知らないうちに、誰かを傷つけたり苦しめたりしてるんだよ。たぶん、それが生きるってことなんだよ」
その言葉はおそらく朔太郎の心の根っこから出た正直な実感であり励ましだったんだろうけど、彼のつぶらな瞳の奥に江森蛍の影を見て、わたしは素直にうなずけなかった。

「そうかもしれないけど、生きてんだから仕方ないじゃん」ってひらきなおるのは違うと思う。たとえそれが難しいことであっても、せつかく人間として生まれてきたからには、自分も他人も心やすらかであるよう、わたしは努めたい。今日伊吹さんの話を聞いて、そう思った」
口をへの字に曲げて反論するわたしに、朔太郎は目をむき、喉を鳴らす。やがて、やっと出た切れ切れの言葉は呆れているようにも、おののいているようにも聞こえた。

「百瀬さんって、すごくタフだね。運動部の人のメンタルって、みんな、こんな感じなの？」

「知らないな」

わたしがなんちゃって大阪弁で斬って捨てたところで、「待つてよ」と鋭い声があがる。

今度は誰？ と振り返ったら、生徒会長が廊下から踊り場に走り出てきた。

わたしと朔太郎の姿を見つけて目を大きくひらきながらも、生徒会長は律儀に会釈する。頼は赤い顔全体が青白い。そのままわたし達の脇をすり抜け階段を駆けおりようとしたところに、さつきと同じ声がかかった。

「待つてつてば、笠原さん」

やや息をあげて追いついたのは、江森蛍だ。いつもきれいに巻いてある髪が乱れている。よほど全力疾走してきたのだろう。階段にいた朔太郎が息をのむ音がしつかり聞こえた。

江森蛍はわたしと朔太郎を無視して、生徒会長の腕を掴もうとした。生徒会長が後ずさり、その手は空を切る。

「笠原さん、ふざけないで」

いらいらと叫び、もう一度のびた江森蛍の腕を、わたしがつきにつかんだ。細い手首だ。うつかり折ってしまわないか、本気で心配してしまう。はあ？ と江森蛍は素っ頓狂な声をあげ、掴まれた自分の手首とわたしの顔を見比べた。ぱっちり二重の目が丸く大きくなり、次に吊り上が

る。表情がくるくる変わって予リスのようだ。こんなに近くで江森蛍の顔を見つめるなんて、そう何度もない経験だろう。薄づきのファンデーションの下に、そばすがうつすら覗いていた。

「何ですか？」

「ごめんなさい。すぐに離します。だから、生徒会長に同じことをしないであげてね」
なりゆきでわたしの背中に隠れる形となった生徒会長は、息を潜めている。

わたしは江森蛍の顔を見つづけながら、徐々に力を抜いて手を離れた。江森蛍は息について手首をさする。

「痛かった？ わたし、握力バカ強いんだよね。本当にごめんなさい」
「だいじようぶ。ちよつと驚いただけ」

江森蛍は落ち着きを取り戻したようだ。今にも生徒会長に噛みつきそうな剣幕はなくなった。ただし用事がなくなったわけではないらしく、わたしの後ろにいる生徒会長に向かって話しかける。

「笠原さん、どうして粘るのかな？ 体育祭の日は迫ってるし、体実のほうも余裕がなくなってきたのに」

⑤「私は――」

それ以上言葉をつづけられない生徒会長の体は、細かく震えていた。わたしはたまらず声をあげる。

「あの、何の――」

「何の話をしてんの？」

今まで壁の一部にでもなったように存在感を消していた朔太郎が、わたしの声を遮って尋ねた。

江森蛍の目がずっと細くなる。

「朔太郎には関係ないでしょ」

「体実が臨時協議会をひらきたいそうなんです」

生徒会長が叫ぶように言った。恥ずかしながら、生徒会の仕組みをまるでわかっていないわたしは尋ねる。

「臨時協議会って？」

「生徒会と学校側で早急に協議する必要があると、生徒会長が要請したときのみひらかれる、両者の話し合いの場です。この場で決まったことは、次の定例もしくは臨時議会で全校生徒に開示され、場合によっては決をとることになります」

これようやく、わたしにも事情が飲み込めた。江森螢は体実を代表して、臨時協議会を要請してよと、生徒会長をせつついているのだ。わたしの背中の後ろから、生徒会長が江森螢に尋ねる。

「体実は臨時協議会で、生徒会から学校側に下校時刻延長の許可を願いでほしいんですね」

「そう。あとできたら、公式戦の控えていない部活動休止の要望もお願い。いずれも体育祭準備週間——最後の一週間だけの時限的措置でかまわないから」

その二つは、毎年生徒達から体実に多く寄せられる希望なのだと、江森螢は力説した。

「今年はもう間に合わないけど、後輩達のために布石を打っておきたくて」

江森螢のかわいらしい声で切々と語られると、いかにも良策のように聞こえたが、わたしは首をひねる。小さな声ではあるが、生徒会長も反論した。

「多く」というのは、すべてじゃないですよ？ 希望しない——むしろ要望が通ると困る——生徒が一定数いるんじゃないでしょうか」

「いるいる！ 部活が一週間も休みになってボールに触れなかったら、サーブやスパイクの感覚が鈍っちゃうよ。体育祭が好きだし大事だけど、部活はまた別腹というか——とにかく休止は困る」

自分の身にふりかかった火の粉として、わたしは少し感情的になって主張してしまう。「後輩達のために」動くのは、別に江森螢だけじゃない。わたしの援護射撃が心強かったのか、生徒会長の声が大きくなった。

「なので、臨時協議会をひらくかどうかは、体実と生徒会の生徒同士でもっとよく話し合ってから——」

「生徒会はいつもそう。毎年理屈をこねて、何のアクションも起こさず、結局、議論を先送りにするの。臨時協議会でもひらかない限り、生徒会は動かないじゃん」

反論のできない生徒会長に、江森螢はダメ押しの質問をした。

「笠原さんも歴代の生徒会長と同じタイプ？ 責任取るのを面倒くさがって、任期の時間切れになるまで逃げまわって、面倒事は次の生徒会長におつつけるの？」

すみません、と生徒会長が蚊の鳴くような声で謝る。周囲を気にしつつ、隠れるように図書室へやってきた彼女の姿が思い出された。あれは体実からの逃亡だったのかと、わたしは合点する。

体実の主要メンバーは三年生だ。それも、学校の人気者を自覚する、声の大きな人達の集まりだ。江森螢一人でもこの迫力なのに、全員に責め立

てられたらたまったものじゃないだろう。生徒会長になったばかりの二年生、笠原翠子の感じた強烈なプレッシャーは容易に想像できた。そりゃと
きには人気のない図書室で、窓から艦船をぼんやり眺めていたくもなるわ。

生徒会長がおおずとわたしの後ろから出てくるのを待って、江森蛍は一步踏み出した。

「笠原さん。臨時協議会、要請してくれるよね？」

「私は——」

江森蛍が進んだぶん、生徒会長は一步さがって踊り場から落ちそうになる。わたしがあわてて腕を掴んで引き戻すと、蛍光灯の白い光の下で生徒
会長は目を潤ませていた。

「急かしても仕方ないよ、蛍」

朔太郎がゆっくり階段をあがって踊り場に戻ってくる。生徒会長とわたしを隠すように前に立ち、江森蛍と向き合った。

「どのみち今年の体育祭には間に合わないでしょ」

「だから生徒会はそうやって毎年——」

噛みつきそうな勢いで不満を口にする江森蛍を制して、朔太郎は落ち着いた声で諭す。

「今年の生徒会は違うよ。ねっ、翠子さん？ 考える時間さえもらえたら、ちゃんと答えを出せるよね？」

「は、はい」

突然自分に向けられた問いに、生徒会長は目を白黒させてうなずいた。江森蛍は髪を指にくるくると巻きつけ考えていたが、やがて小首をかしげ
る。

「いつまで？」

「え」

「臨時協議会を要請するかどうか、いつまで考えれば答えが出るの？ 我々三年の体実が活動できる体育祭までに出してくれる？」

抜かりなく詰められ、生徒会長はうなずくしかなかった。もともと赤い頬の色がさらに濃くなる。一方、江森蛍はベストではないがベターな展
開に持ち込めたと、手応えを感じたらしい。肩の力を抜いて、わたし達に笑顔を向けた。

「あなた達が体育祭にあまり興味を持っていないことは、知ってる。お祭り騒ぎを苦々しく思ってることも、見ていれば伝わってくる。でも、だ
からって、体実を敵の親玉みたいに扱わないでほしい。同じ野亜高生として、みんな楽しんでようよ」

⑦ 江森螢のかわいらしく真摯なお願いに、わたしも生徒会長も惹きつけられた。誰もが見惚れてしまうその笑顔の効果を、江森螢はきつと知り尽くしている。だから満を持して今、放った。効果はきめんだった。言葉は右から左に抜けて意味を結ばず、ただ耳に心地よい声とかわいい笑顔だけが印象に残り、長い物に巻かれてしまいそうになる。

ただ一人、その武器の通じない相手がいた。朔太郎だ。

「みんなで楽しむためには、みんなが楽しめる環境を整える必要があるんだ。体育祭実行委員会が生徒会と話し合うべき議題は、そこじゃない？」朔太郎の言葉に、江森螢は息をのみ、その完璧な笑顔が崩れる。頬にさした赤みが、怒りのせいか恥ずかしさのせいかはわからない。江森螢はそれ以上何も発言することなく、体実の仲間のもとへと戻っていった。

(名取佐和子『図書館のはこぶね』)

問1 ぼうせん部①「全身がむず痒くなる」とあるが、どういうことを言っているか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 背の低い朔太郎がさらに小さく見えている上に、虫に何かをされているようで気持ちが悪いということ。

イ 今はあまり関わりたくない朔太郎が小さい虫のようにたかってくるので、不快な思いをしているということ。

ウ 朔太郎に負い目を感じていた上に、触れられたくないところを触れられているような気がしているということ。

エ 朔太郎のやさしさを感じていたので、話題に触れられないようにしたが叶わなかったということ。

問2 ぼうせん部②「黒目がちな目が一瞬光った」に込められた朔太郎の思いとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア わたしの言葉を聞き、生きることの難しさを知り、自分自身の言葉に責任を持たなければいけないという思い。

イ わたしの言葉を聞き、まだ考えはまとまっていないものの、生きることに関して確信を得たという思い。

ウ わたしの言葉を聞き、気にしていたことを確認することができ、共に謎を解いていきたいという思い。

エ わたしの言葉を聞き、心が穏やかな気持ちになり、今までのことを許してあげたいという思い。

問3 ぼうせん部③「すごくタフだね」とあるが、どのような点について述べているか。三十字以内で説明しなさい。

問4 ぼうせん部④「頬は赤い」とあるが、どのようなときに「赤」くなるか。空らんにあうように本文中から九字でぬき出しなさい。

（九字）
を感じたとき。

問5 ぼうせん部⑤「私は——」に込められた思いとして最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア いますぐには決められないが、時間があれば逃げられるという思い。

イ 時間をかけて話し合いをすることができれば、答えを出すことができるという思い。

ウ 何も決めることができないので、先生に協力してほしいという思い。

エ 責め立てられなければ、冷静に対応することができるといふ思い。

問6 ぼうせん部⑥「後輩達のために布石を打っておきたくて」とあるが、どのようなことをするというのか。最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 全校生徒が優先的に体育祭練習に時間を使える環境を整えようとする事。

イ 体育祭の練習のために部活動の時間が削られないようにすること。

ウ 臨時協議会を開くことで来年以降も体実の意見を通しやすくすること。

エ 生徒会との話し合いをできるだけ優位に進められるようにすること。

問7 ぼうせん部⑦「江森螢」の説明として、正しいものには○で、誤っているものには×でそれぞれ答えなさい。

ア 現行の体育祭で興味をもてない人も楽しめる環境づくりにつとめている。

イ 体実の意見を通すことで困る生徒がいることに気づいている。

ウ お祭り騒ぎをするだけでなく、全員が協力して楽しめる方法を考えている。

四

次の各問いに答えなさい。

問1

①・②の□にふさわしい言葉を後から選び、ことわざを完成させなさい。

① 三人寄れば□の知恵

ア 文殊^{じゆ}

イ 仏像

ウ 住職

エ 寺社

② 雀^{すずめ}白^{しろ}まで□忘れず

ア 鼻歌

イ 踊^{おど}り

ウ 水浴び

エ さえずり

問2

次の空らんには当てはまる言葉を後から選び、記号で答えなさい。

① () 彼が言ったことを理解した。

ア ころおきなく

イ おおむね

ウ あながち

エ かねがね

② チームに迷惑をかけてしまい、おのれの()

() を痛感する。

ア たくましさ

イ せんさいさ

ウ ふがいなさ

エ いじらしさ

問3

ぼうせん部と意味・用法が同じものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

やはり、私のまいた種は、今日も発芽しなかった。

ア 姉は走るの|があまり得意な方ではないらしい。

イ 私は、朝の|ニュースはかかさずに見ている。

ウ この写真に写っている|のが、たぶん僕だと思う。

エ 君の|歩く姿は、若い頃のお父さんにそっくりだ。

以下余白

—